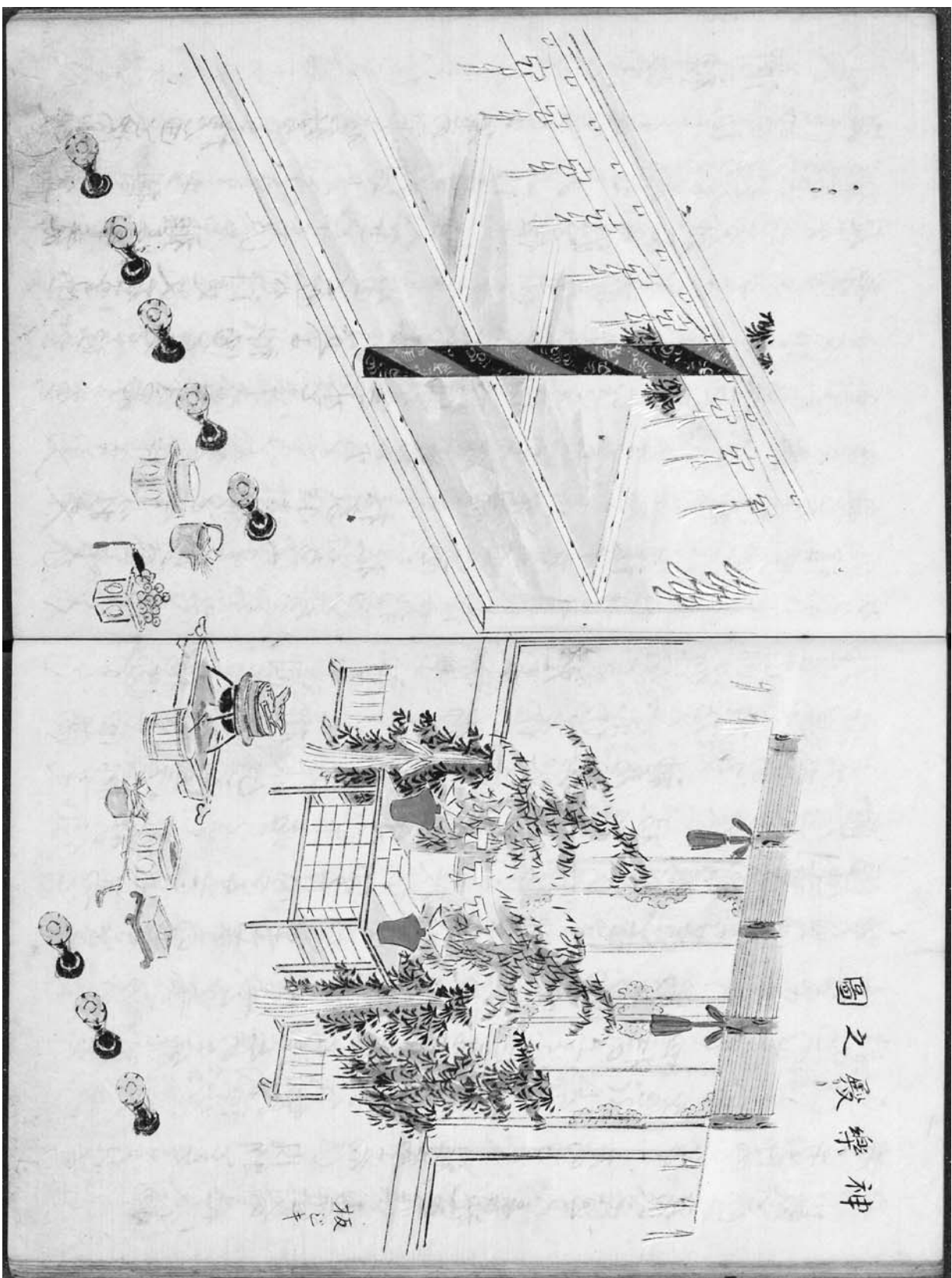


三重県総合博物館資料叢書

Mie Prefectural Museum Collection Report No.11

No.
11

神樂殿之圖



板江

國學院大學所蔵

伊勢太々神楽講図会

ごあいさつ

三重県総合博物館 (MieMu) も今年で開館一〇年目を迎えることができました。入館者数も順調に推移し、これも多くの皆様が、基本展示や企画展、および各種イベントにご来館いただき、当館をご利用いただいた賜物であると厚くお礼申し上げます。

『三重県総合博物館資料叢書』は、研究活動の一環として行った資料調査の成果や、収蔵品を中心とした資料目録、また資料翻刻などを掲載し、皆様のご利用に供することを目的として編集しております。今回は、基本展示のなかで復元されている御師の神楽膳の根拠となった、國學院大學所蔵の『伊勢太々神楽講図会』を取り上げ、主要部分の翻刻と写真を掲載しました。

この『伊勢太々神楽講図会』は、最大の御師三日市大夫次郎に次ぐ規模の檀家を擁していた外宮の御師久保倉大夫邸での神楽や供された料理の詳細を、絵入りで書き残したものです。このような記録は比較的多く残されていますが、本資料のように詳細な絵入りで書き残された記録はなく、神楽膳の復元に際し大いに参考となった資料です。資料叢書は、当館が所蔵する資料を中心に、その翻刻や目録などを引き続き刊行していく予定です。本書が、三重県の歴史や文化、自然についての研究に寄与できれば幸いです。

今後とも、より魅力的な博物館となることを目指して活動が続けてまいりますので、皆様のご支援、ご協力をお願いいたします。

令和七年三月

三重県総合博物館

館長 守屋 和幸

目次

口
絵

ごあいさつ

目
次

凡
例

図
版

翻
刻

資
料
解
説

あ
と
が
き

.....			
33	30	21	1

凡 例

一、本冊は、『三重県総合博物館資料叢書』No. 11として、國學院大學所蔵の『伊勢太々神楽講図会』の主要部分の翻刻及び写真を掲載したものである。

一、丁数とその表裏は、丁数を算用数字で、表は（オ）、裏は（ウ）と表記した。

一、翻刻にあたっては原本の体裁を重んじるよう努めたが、一部改めたものもある。

一、使用漢字は、固有名詞を除き原則として常用漢字を用い、それ以外は正字を採用したが、俗字・異体字・略字等をそのまま用いたものもある。

一、変体仮名は一部現行仮名に改めたが、原本体裁を尊重する観点からそのままとした。

一、収録にあたって、以下のような表記を用いた。

(1) 適宜、読点、並列点を付した。

(2) 虫損、破損による判読不能文字は、字数の判明する場合は□で、文字数が不明の場合は「」で示した。

(3) 見せけち文字は二重抹消戦で表記した。

(4) 人物比定などの編者の注記は、（ ）に入れて適宜配置した。

(5) 文字に疑義がある場合は（カ）或いは（ママ）と注記した。

一、本冊の翻刻及び解説は当館学芸員の太田光俊が、編集と校合は小林秀が行った。



(2才)

(1ウ)



(3才)

(2ウ)



(4才)

(3ウ)



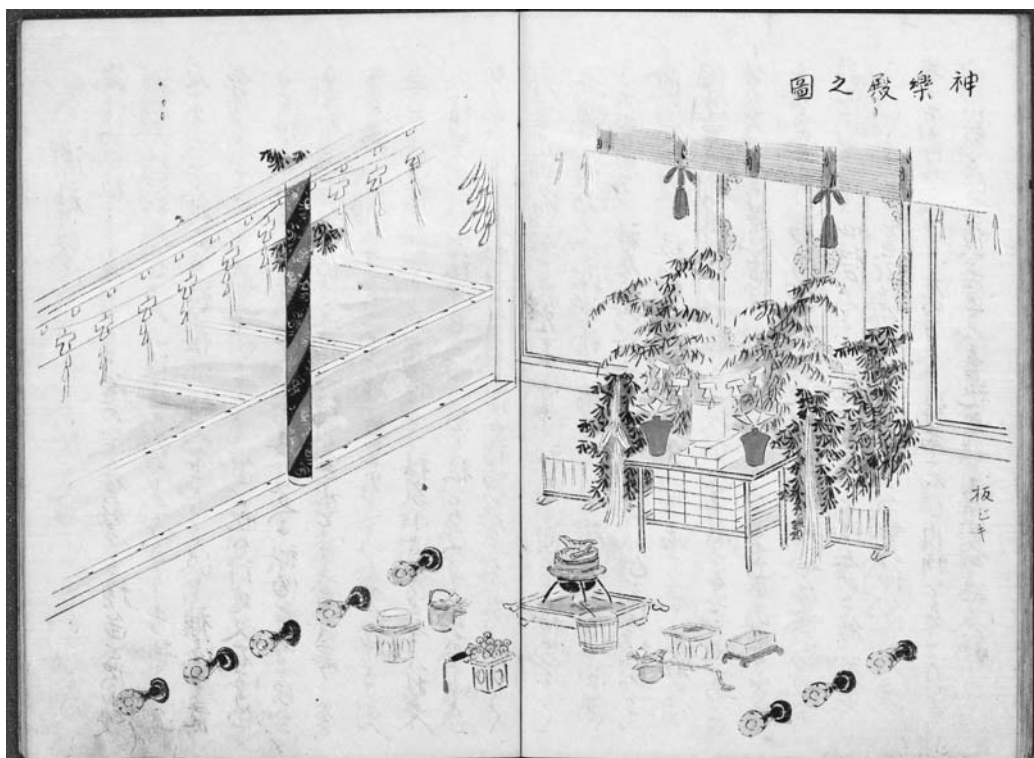
(5才)

(4ウ)



(9才)

(8ウ)



(15才)

(14ウ)

御神樂

先達ののちとて幣とする釜の下と横笛と吹小鼓
袋とあとのまきやあま
先のまきやうと入るものうの一口音はやんうう。歩掛るま
たより出る神より後一は又世とるひと神より後
あうくく又女は流し世とるひと笛と吹る也又右より出
る神より後一は又の神より後一は又の神より後一は又の神より
あうく。又口の箱といふき侍女釜水とて。たき器は水と
盛る神より後一は又の神より後一は又の神より後一は又の神より
相とて神より入る。折居帽の社家小き幣とてやうおま
て溝中へ出るは溝中底下の面と振とるひは流しものともひ
るよりし。相おのづかの五人、侍女祓禊とてうのれくといふく

ふぬひあり。又左より右の社人右の方



と云ふ。この社人右の方

三尺ほどの白布の紐と三つ折てもち上げ板の裏より

四方あそびていのも。あそびあそび也右の幣をもちひ

神中の風。いづくの右の方。この社人神楽の祭文あるやよき

上る。柳を木田つとてうつ。色社人きく板の裏あそびの上

は紙をひきかき。きく柄りと云ふ。紙の裏あそびと

く入る也。金との金と金又水と汲る。又笛鼓をうそ

たの神もあそびの上より。神楽もく。神と云ふ。一



たをもちりて。神あそび。神あそび。神あそび。

小鼓あそびなる。神女神といふ。笛を鼓にききりもちあそ

神座とある毎に神前にはねあり五ふりして元の席へ飛ん
 侍女などをしてへいどの神座とつて万度の祓と禊中へ
 いゝつて。元の神子座の最三方と神前を侍りけり
 此の社人雛形の連連四隅のあたをなく神子よりせし
 是とありて最終也とめよう小鼓おつて横笛を鼓を
 打とあり物柳の本のやうなとちつあつちのやうなる二枚の板と一枚のきり
 毎夜時々のおとそここの社人禊中へ神前も首尾よく
 初詣の出まゝいひあつて元神の禊中へ泣といふはあつた
 神座とあるけりといふ元日の社人膳の飯といふは禊中
 皆く神前よりよめてぬん 此神座の神よりききあれた初より
 等とつてあるは元日の神よりかといふ

又より宮より忍上りて海をたぬりて山師の門外
 なるより河の家へ（海とまき入る所）の商人を招きつり
 醫師なるの意をなすもまらひぬと云ふは（性果）もまき
 外宮 御社社中の御門と入得れぬ 山師より金糸籠の社人
 敬海の言と持来し海中の分是（海） 末社天の宮戸
 系師（山師）よりて大臺所の入口より唐（ま）と云となく
 まきと云 下宮よりひりふ（海） 首尾より御所（い）ふとく
 山師（山）より 左（右）より 後仕（右）膳と云

本膳

木具膳朱櫛

七五三といふ

多
宿
分
赤
光

貝形ヤキの
紅芝茶

草子
しよのゆが
あゆみ
まゐり

是の
いふ

分反

二石

志の
眼

汁 麵切方

かや
心
か
ま
た

賈逵

二

あふ

20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525
 526
 527
 528
 529
 530
 531
 532
 533
 534
 535
 536
 537
 538
 539
 540
 541

さとおあひ
つばき

千代久せう子こ



燭物 帳

平

かんこ
かんこ
かんこ
かんこ
かんこ
かんこ

川盤

めつ魚

なもと
なもと
なもと
なもと
なもと
なもと

あまひふたに
昆布

四割
紅ふた
紅ふた
紅ふた
紅ふた
紅ふた

吸物

こち
さち
さち
さち
さち
さち

塩漬
大かき
大かき
大かき
大かき
大かき

ふゆ
ふゆ
ふゆ
ふゆ
ふゆ
ふゆ

吸物

ふゆ
ふゆ
ふゆ
ふゆ
ふゆ
ふゆ

大盤

肴
肴
肴
肴
肴
肴

肴
肴
肴
肴
肴
肴

湯



本奥の清基
名ひの舟盛

くも合
うけきし河内也

茶

菓子



所を夜に入ろう又馳をくく娘を川邊にたり
ほり方家。業平。汐汲。振袖。彦次。三番叟
にとういふもん物事
先年中産まう方取
りえの生をひし物事
二見松竹の古清基ゆき
切は後仕の者かまきり
松崎松ぞう
松崎松ぞう
松崎松ぞう

夜食

平 多い

け 多い

菓子

千代久

飯

廿二日

茶 菓子



飯

能 ひき

汁 しる

二

小皿 こしる

け ひき

目 め

壺 つぼ

飯 い

四好以うかてきく物態一ゆくふき茶をきく并書 切にの

ふあふふふかこの者おひひやふかりふふのばふふふふふ

ようふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

中食 ふふふ

汁 しる

鴨 鴨

鴨 鴨

平 ひら

飯 い

き き

是谷をふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

平 龍さし
病食

又

汁
飯

廿三日 前夜より ぬすつく

平 龍さし
病食

汁
飯

中念寺の寺より 伎台 所 祈禱の所 礼 并 所 せのうと 道
高日内宮のたき 神樂 奥 所 所 並 谷 寺 更 正 授 うき
菊谷を 寺 方と ね けり 所 所 以 けり 之 ね けり けり
相の山と 越る 山 寺 けり けり けり けり けり けり けり
三味線と 寺 けり けり けり けり けり けり けり
及 寺 小 女 けり けり けり けり けり けり けり

古市の夢を中のかたがたに小き居たハたき居なり
ちのやまをふに流とゆいさいといふとあるなとある
又相の山あり小きな味をひくやもあり又延とさきる飛
ニ人しくさるとさうくさうくさうくさうくさうくさうく
物をとひるも又さうくさうくさうくさうくさうくさうく
力持のやうなこりいづれもさうくさうくさうくさうく
やうきとやうきとやうきとやうきとやうきとやうきと
やうきとやうきとやうきとやうきとやうきとやうきと
先のやうきとやうきとやうきとやうきとやうきとやうきと
やうきとやうきとやうきとやうきとやうきとやうきと
山田といふ宇治橋といふやうな川ありあまの川

櫓の上よりまきしらに降とさでまてうりし又
廣うとざるあてうりかざせしとる水又入るに
てしひつひとる面印さし福多き道谷を又方とる

内宮をこ御神樂

神前勝竹笠の振但陽とのかへたのち右に儀三儀と云う
水は赤湯御に柱も同湯と云う 祐也人たを右も左も

曰社人八人せうはき人



四方よりけ幣と云う 祐也

又笠もく金の湯と云うき之の笛を鼓し鼓ありと云うし
六人の神子かゝるく流の流あり 曰祭文より上社家何やと云ふ
。道谷を又あきぎの神夜ありと云ふ色の社家よりとる「と
を社家の扉と云う内よりかゝる白布内へ入け中の扉開く

音安由よりくとして立出祭文とより「の社を」として入
 まてけるくとい神ある祭田を越かつてある。又神子
 二、赤穂藩のちりけくまふれ神人神内飯といふ人又
 河津の多子千歳といふく二人の神子といふ人、流しをせとて
 寂い千歳と盤中へとも入、半とつて立出、社人は集とて、
 神前を伝ふ。又  け勢とりて祭中るく
 一、神殿とて名くらひ、河津神内飯といふく「の社を」
 神中の連名ありく、 け勢とりて祭中るく、
 河津といふく神中のこのより、 け勢とりて祭中るく、
 内宮河津社祭中門石の間入神ありき、末社おれ

此所居るは八色江に清えいづるは皆く此の如くも
ちて上下とも此の如くふて此膳部もはさび八本具と
異く一節やもの我一日ておすくもてまはるは
いれをいふと忘のまもて此の如くも

此等 膳部 膳部 赤飯 酒 ちの飯

此等中御膳をまへて之を六代兵衛 御後並に御膳

不膳

二

書

うつを
まろち
めい
巻
うき
せうか

かし
いり
飯
汁
飯

うす
板
汁
飯
汁
飯

膳物 中初

皿 えん
むふふつふ
つひりも
さくふ
さくふ

平 ひらけつこ入
り割

吸 もろ

舟 ふね

舟 ふね

舟 ふね

舟 ふね

舟 ふね

舟 ふね

廿日にもなりしと相伝ふるよう磯田ゆくもいと甚指
きくた飲まも忘し中の内務省甚指代府やあるを和後尾
五五部の極彩と娘殿えぬとふかある他所と兵部隊川
梅彩。ある年入柳川新市。昭あきふる千師。若殿
狂云出入儀。五八梅彩の所川他女。此と
なる市川五彩。五船名あ柳川新市がらふのまを

翻刻

○伊勢太々神樂講図会 完

(1才)

太々神樂講連名帳之序

神風伊勢常世之國百船度会郡仁鎮座

内外宮太々神樂登申奉留波、千早振神之

御代鈿女命乃俳優仁妙留曲調乃音乎

頭神樂乎奏給志与利、天照皇太神天岩

戸乎開記賜比、明彩神徳乎普久六合仁

令満賜布毛此神事乃起也、然者神明乎

礼奠乃式波此御神樂仁勝多留波非良之、

因慈神忠乃輩乎会集比弓太々講乎起立

講中毎年尔精誠乎積、太々御神樂乎奏奉利

(1ウ)

国恩神恩乎毛射之奉、猶行末乃神助乎

祈奉牟止諸者也、夫神者尊敬所仁

靈徳乎照志、人者神之感応仁頼弓至幸大

福乎得事顕然、講中一致乃於有丹誠者、

家業繁栄子孫長久寿福神助加賜布

事常磐堅磐奈良牟、誠恐誠惶謹言

安永五丙申年夏

久保倉太夫

講親之方持伝へし書付とて見せけるを写す

寛政七年卯夏日

(2才)

太々神樂講

連中迎の

駕籠

新茶屋といふ処まで

御師代官出迎、爰より

かごをそろへ二見へゆき

垢離かきて御師の方へ

つくなり

川さき二見近辺の子ども

駕籠のきハによりきて

ミなく声をそろへ

ゑへどのさんぜんしよくと

ものこふ

(2ウ)

ふきやがらくり

参宮道所々にあり

さまく名代かんばんをかける

いぬきのまと

すいのうち

寛政已来見えす

(3ウ)

二見か浦

鳥居は二見の神社

たて石を浮玉明神と

いふ、うしろの山のうへに

伊勢三郎もの見の松と

いふあり、大夫の松ともいふ

はるかにあふみの山

すゝかやま三つなやま

尾張のくに

のまうつみの

山くゞみゆる

(5才)

外宮

豊受皇太神宮

五大社

東西之両殿ハ

左右ニハナレテ

立リ

(5ウ)

天岩戸あまのいはと

(6才)

外宮より

八町のほり

洞あり

高天か原

ともいふ

御境内

びく尼

(8ウ)

内宮

東方殿 アマノタチカラヲノ命

御本殿

西方殿 ヨロツハタトヨアキツヒメ命

(10才)

朝熊嶽

虚空蔵菩薩

(10ウ)

ぜにかけ松 久保田 椋本之間

むかし盲人参宮を心さし此所まで来り、

行程いくはくと尋けれハしよまのはい盗人こたへて、

三日とをる三世野、七日こゆる長野、

十日ゆくといく野とて、廿日路もあらんといふ、

盲人旅行になやミて貫さしを

松の枝にかけて拝せり、

盗人はをとらんとせしに

おそろしきくちなハと

見えしかハ、神罰を

恐れ悪念をひるかへし、

盲人にやうすをかたり

ともにうちつれて

参宮したりけると也

(11才)

五月十九日、雨ふりたれと、津の駅を立て、未の刻過る頃

新茶屋の秋田屋といふ待うけの茶屋にいたる

元浜町	いせ屋清次郎	御迎	久保倉大夫内
江戸	同 吉兵衛	御迎	坂半右衛門
高砂町	同 利兵衛		
太々御神楽講	同 利右衛門		
御講中様			

如斯立札を軒に立、丸二澤潟紋の幕、講元連名染たるヲ見世に張たり、手代半右衛門羽織袴、同様手代五六人、同様前髪五人、講元之衆出迎、折節の雨天、サアくなどあいさつし銘々に足すきだらひ、雨具きやはん、多くの女子とりくすき荷物等ハ袴之者座敷へはこひ、イサくと案内し、すぐに風呂に入、座につけハ、坂半右衛門講元立出、御きけんよく御着(11ウ)

目出度とあいさつあり、御師より御迎の菓子披露也

座付 吸物 ミそさんしよ 酒 体肴 鯉さしミ おろしミそ
提重 ミそさんしよ いろいろのいまさか 一重 かまほこ 小くし れんこん
くり菓子 あわひ うなき しいたけ
ゑび さんかん かふら

しはらくして御師手代立出、各様ハ出入の御師方へ御立寄被成之御方ハ、其段通達可仕と申二付、夫々御立寄の方ハ御しるし被成候、但内宮之分ハ手代へ遣候へハ、追而請取を取遣候

千代久 貝割 汁 いせミそ 手しほ ひらめ
ひたし 葉にんしん さしミ

夜食 香物 たくあん 焼物 小鯛

平 あわひ 飯 あわひ 吸物 こち
しいたけ すたれふ すまし ゆ

御師方の世話役講元立出、御組の御方々御荷物御取合可被下(12オ)

明朝御師方へ送り申候とふれありき候
廿日、前夜よりの雨ゆへ水まし、宮川わたりかね候とて迎遅し
千代久 もミ瓜 汁 とうふ
あふらけ

朝飯 香物 焼物 かつを

平 ほらつゝ切 飯 青こぶ

女子商人扇紙類、当所名物紙たはこ入、京伝のやうにはなけれど、名物なれハめせとてさまくすむ

代官坂半右衛門より二見の手拭、両はし紅紋にし銘々へ進上也

四つ時過る頃、川あき候よし荷物を送り迎の駕籠くる

四つ手かこに毛氈二枚しき 小畑宮川辺の子供ら太々さんぜん

くだんせといふ、川崎辺の子供ハゑだなさんぜんしよくといふ(12ウ)

黒瀬なハて、此あたり田毎に井を掘てはねつるべあり、海手に黒瀬

いしきの村々見ゆ、皆瓦ふき也、塩合川わたし三津むら

二見村松坂屋といふ茶屋に代官待ゐたり、爰にて用意し

ミなくこりにゆく、二見の浦折ふし汐干て立石までゆく

爰にてかけしめ上げなさんせと女子うる、ミなく垢離かきて

一樣の手拭花くしく茶屋へかへる けふハくもりて尾張の山々二子山などいふも見えず

千代久 わりな 汁 めひゞ 焼物 小鯛
青あへ ぬまり出て味なし

中食 香物

平 いか 飯 なす 酒肴 いろく
包黄ゆば

追々もとの道を二軒茶屋といふ所にまち合せ、かごを揃へて
七つ時頃山田岩渚町御師久保倉大夫へつく

(13オ)
門の入口に竹を立、注連をかける、講中駕籠にて乗込玄関へ

横付也、講元代官手代あまた待受、夫々案内して座敷へ

通る、至て広し 早速講元に願主此方組六人八十畳敷計の部屋をとりて、食事の折々広座敷へ出至る、都合よかりし

座付 ひらかつを香之物

雑煮餅 こんふな

本膳

二の膳

鱈 大こんたてしそさかなせうが

汁 あられとうふのり

ひらめさしみ

汁 鯛 青こぶ

壺 かわこほうすたれぶすまし仕立

飯

猪口 せうかいり酒

平 あわびまつたけいんげん

焼物中鯛 あわび塩から

吸物 みそたこ 引而 香物 たくあん早付瓜

引盃 酒いく度もめくる

(13ウ)

御師久保倉大夫衣冠にて立出、太々神楽講中つゝかなく目出度とあいさつ、一寸したるもの也

夜食 梅ほし包こせう

うんとん

吸物 みそとうふ

てしほ 三バいつけ新とうからし 引肴 あわひふくらに

内宮御師益谷大夫より蒸籠参り披露也、着の日より

かみゆひ四人、湯殿広く七人入程の風呂二ヶ処にあり、大体

山の手の湯屋程也、此夜ハ空晴て月を見る、夜具けんぷ也

廿一日くもる 朝茶菓子 うくひす しんこ

鱈 たいからしすあへ 汁 魚すり なかし

大鯛浜焼 銘々へ てしほニひく

朝飯

平 なすくずに

飯

酒度々めくる

(14才)

外宮御師久保倉太夫座敷之奥に神前之間あり、板敷にて

前四本の柱丸く赤地黒地の錦にて巻、神の枝をさし、四隅

に大幣あり、神殿ハ木地、扉に金具繁し、比前三方神にて

囲ひ、中二段に祓をつみ、高き机に朱の平治とくり、左右の竹に

注連を張、雛形多くつけ、中に一枚紙切かけたるケマンといふを

付たり、左に苧を長く神にかけて立り、右にも苧の長きを串

に付て立たり、前に湯立の釜、水桶もあり、なかへくわへ三方の上に

鈴をのせ置く、四柱の上えに白麻一布幕を張、しめに雛形を付

てひく、正面に簾かゝれり、神殿の左右に下髪老女の神女也、四人、釜の

右に打かけの女座せり、左の方より神前に向ひ、風折を着たる社家

五人小鼓をひかへ座す、其廻りハ素袍多ほし子供交の社人夥し

(15ウ)

御神楽

先清めの祓とて幣をとる、釜の下を焚付ると横笛を吹、小鼓

袋さなどの五六寸なるに先のうづつ、一同音に何やらんうたう○打掛したる女、

左より出たる神子に鈴を渡し、後又笛をわたすと神子立て舞ヒ、

しハらくして又女に鈴も笛もわたし、笛を吹バ引也、又右より出

たる神子も同様也○左の神子舞の後、ながへに神酒をうつし神子に

すゝむ○又一つの箱をいたゝき備ふ、侍女釜へ水をさし○丸き器に米を

盛て神子のまへに置を、五六本の串に焚火をうつし米の中にさし入、

拝をなして神子ハ入る○折烏帽子の社家小き幣をふり、箱に入

て講中へ出すを、講中麻上下の面々祓をなす、是清めのはらひなるよし也○扱折ゑぼしの五人へ、侍女神酒をなかへよりめいゝゝいたゝく
(16才)

まねひあり○又くわへにても同様にす、《絵》の社人右の方の

《絵》綿、白布、苧《絵》を取に《絵》の社家にわたす、右の《絵》人

三尺はかりの白布の如きを三つに捌てもち出、板の間にしく事

四方たゝみてハのはし敷く事度々也、右苧の幣にてはらひ、

講中めいゝゝいたゝく○右の方《絵》社家神樂の祭文なるやよミ

《絵》の社人太々講中の所名前をよミ上る
上ると拍子木笛小つゝミうつ、《絵》社人立出て板の間敷ござの上

に紙三枚計かさねしき、小柄刀を取出し《絵》紙の両隅へ穴を明

て入る也○くわへの酒を釜へさす、又水を汲み入る○又笛鼓にてうたふ

左の神子赤地錦の上着、もへき錦袴にて鈴を取うたう、一廻りして

《絵》左右にもちて廻りて神前におく○爰より

小鼓急になる、神女袖をかいこミ笛太鼓チヤンキリもなる、

(16ウ)

神子拍子をふむ、三方の備へもの神前にさゝけつゝ立舞、此うち

一同何やらんうたひゝゝ、銘々小鼓をうつ、此拍子アブクタツタ、ねヘタツタ
くゝと聞ゆ

爰にて講元まき錢あり○右よりちはやの神女立出て笹を

とり湯立の舞、鈴をふり舞○又右より茶地にしきの上き、もへき錦の

袴の神女鈴の舞拍子急也、爰にて中入、ミなく座敷へきて休息

中食 手しほひらかつて 赤飯 てしほあわび 吸物たい
す貝 ミソ

又各神樂の席へ出る○左より茶錦上ぎもへき錦袴の神女鈴の舞、

右よりも同様、此舞ミこの数ほどあり、うしろの方にいびきなど聞ゆ、

至てたいくつ也、舞一段にまき錢あるゆへ、おとろきてハ舞をみたりと

いふもあり○夫より左右の神子一樣黒地惣もやふの打かけにて

金の扇をもち○ミなく並出神前に立出舞廻る、《絵》の五人同しく

(17才)

神殿を廻る毎に神前に拝あり、五度計にして元の席へ座す、

侍女ながへくわへにへいじの神酒をうつし、万度の祓を講中へ

いたゝかす○左の神子扇の舞、三方を神前に備て引、此うち

《絵》の社人雛形の注連四隅のしめを取て神子に渡せハ、鈴と

是をもちて舞終也、はしめより小鼓ハ打つゝけ、横笛太鼓は

折々あり、扱拍子木のやうなるを打ツ笏のやうなる二枚の板を一枝まきに
もちて、一枚の平をうつ也

毎夜時廻りの打も是也○《絵》の社人講中へ神樂も首尾よく

相済目出度とあいさつして引、神子は講中へ鈴をいたゝかす、打かけの女ハ

神酒をかへらけにいたゝかす、《絵》の社人御膳の御飯をいたゝかす、講中

皆々神前ちかくよりて拝す、御神樂ハ程久しき事なれハ、初より

筆をとりてしるさすは覚ゆることかたからん、

(17ウ)

夫より宮廻り、惣上下にて講元は箱に錢を入もたせ、御師の門外

出るより町の家々へ錢をまき入る、歴々の商人又は格子つくり

医師などの妻女などもまろひ出て是をひろふ、往来へもまき

外宮 御本社中の御門迄入拝礼す、御師より《絵》素袍の社人
ちらしゆく、

散錢の筥を持参し講中の分是へ請る、末社天の岩戸へも

参詣し、御師へかへりてハ台所の入口より広ミへまき、是をおく

まきとて下男下女ひろふ事也、首尾よく相済いく度もゝ

手打賀し、ミなく座敷へ居ならふと給仕之者膳を出す

本膳

木具膳 朱碗

七五三といふ

(18才)

鱈

たい
岩たけ
くり めうか せん
赤黄三しのり
けん ほうつき
貝形やきしほ
紅さんしよ

黄色
汁むすびゆば
しめしたけ
青ミ

壺

せんまい
いか せうゆ

飯

二石

しぎの
羽盛

汁 鯛切身
吸口 ゆ

かや
むすひ きんせん花
くわし

千代久 葉にんしん
ひさし

三

手しほ

なごし かハ付
さしミ

汁 めひ
とろゝに
似て味なし

さゝぬ あわび
つぼやき

千代久 せうがず

(18ウ)

焼物 鯛

平 ゑひ
きんこ
ねいも
つくいも
あんす二ツ割

かハラけ

二見台物
三尺五尺
立石のり
磯草
しめわりな
紙かんひやう

引盃

ぬつへい はも
れんこん
くしら角切

(あわひふくらに
昆布

(貝割
紅かんてん 木具 のし 色糸
すひたし

吸物

ミそ
こち
さんしやう

塩煮

大かまぼこ

てしほ

(しいらのすし
しそ

吸物

鶴 うスミン
しゆんさい

大盃

肴千代久 塩から

松竹
生ものつるかめ作りもの
ふさいく

香物

てしほ
もり口たくあん引 湯

(19才)

木具の嶋台 くも金

かわらけにて酒納メ也 茶

ゑひの舟盛

菓子 霜ふり
あるヘイ 松かせ

既に夜に入たり、又馳走として娘子供川崎おとりあり

後に○万葉○業平○汐汲○振袖○座頭○三番叟

おとりあり見物事也、先年中座にて大坂下り 才次 此座敷へ
目見への出逢ひに似たり

二見 松竹の大嶋台出たり、切に給仕の者女子ましりにて
松坂おどり、殊之外賑やかにて更るもしらさりし

夜食

平 たい
わりな 汁 とうふ 香之物 もり口
千代久 瓜もミ 飯

廿二日もくもりたり

朝飯

茶 干菓子

(19ウ)

鱈 たい
おろし大こ
けんせうが

汁 しめし
ゆり

小皿 かつを
さしミ

二

汁 たい
こぶ あわび
貝焼

壺 さゝあ
夕かほ

飯

千代久
からしず

四ツ時頃よりかこにて朝熊へゆく、くすへ茶屋にて弁当切めしにしめ
山にかゝりてハかこの者頼むゆへ、処々かちにてのぼる、霧ふかく下向
より雨ふり出たれハ、茶屋迄いそきかへる、爰にも講元手代待受たり

中食 千代久 なす
なこし

汁 ねいも
くしら

焼物 鯛
色付やき 吸物 ほうく
ゆ

平 たい
あんかけせうか

飯 香物引

益谷大夫よりも待うけ、せいろ参り、くわしを出ス 酒 鯛のさしミ
雨も少しやミ暮まへ久保倉へかへる此茶屋二階座敷方見下す流在、
爰へも子供ら女子来りて水に
かけ入取、かおもしろくミなく 錢をまく

(20オ)

平 焼とうふ
にひたし

汁 すまし

夜食

手しほ ゆみそ
又唐ミかん

香物引

飯

廿三日 前夜より雨ふりつゝく

平

はんへん
黄色むすひゆバ
ちりめんぶ

汁

少し
青ミ入

香物

焼物 もうを
にびたし

飯

○中倉七郎太夫より使くる、御祈禱の御札并《絵》やせいろうを送る、
当日内宮の太々神樂興行、御師益谷太夫手狭二つき

菊谷太夫方を頼ミ候よし、四ツ時頃よりミなくうちつれ

相の山を越る、小屋にうつくしく化はいたる女子、ゆきゝのあれば

三味線をはらくとならし、あゝアくとせわしく引ながら錢を乞、

道にも小女あまた袖袂にすがりつきて、やらんせまかんせくといふ

(20ウ)

古市の茶屋く、中の地藏、右は小芝居、左は大芝居なり、

大坂のやうに屋くらに鎗を出しさいはいを立る、爰を過て

又相の山あり、小屋に三味せんひく女子もあり、又蕨をしき、子供

二三人してさゝらをすりく、わゝというて立たり居たりして

物乞もあり、又くゝり頭巾に大槌をふり居たるもあり、又

力持の身ふりにこしらへ、いつれもうつくしくけはひ立て、手を

ふり足をふミ、やつとこせ、よいやさど拍子とる、そばに母らしきか

髪かたちもきれいにして参宮のゆきゝに、やらんせまかんせ、

先の江戸さん中の嶋さん、こな子にやらんせ、たこさん

やらんせまかんせと口々に乞、宇治の町諸商人多く、

山田も同じ、宇治橋をわたるに川原に子供あまたあて

(21オ)

橋の上よりまきちらす錢をさでにてうくるもあり、又

落たるをざるなとうちかぶせてとる、水に入たるハ飛入

てもひろひとるか面白き也、程なく益谷太夫方二至る、

内宮太々神樂

神前饗付皆同様、但湯立の釜ハ左の方、右に俵二俵置たり、

水引は赤地錦也、柱も同錦にてまぐ、神女六人左二座す、右二も左二も

《繪》社人八人座せり、此壺人《繪》四方に向、此幣にて祓す、

又笛にて釜の湯をかき立ふる、笛・太鼓・小鼓ハしなへにてうつ也、

六人の神子かへるく鈴の舞あり、《繪》祭文よミ上社家は何やらんうたふ

○益谷太夫あさぎの神衣《繪》にて出、《繪》の社家にもたせる《繪》を

取、神殿の扉を明て、門にかゝれる白布内へ入、此中の扉開く

(21ウ)

音聞ゆ、しはらくして立出、祭文をよミ、《繪》の社家へわたして入、

すへて此間うたひ、神子舞笛・太鼓・かつこ急になる、○又神子

二人赤地錦の打かけにて立出れハ、社人神酒御飯をいたゝかす、○又

釣竿の糸に干魚をつけて二人の神子にわたせハ、鈴と是をもて

舞ひ、干魚を盤中へをとし入、竿をつき立舞、社人此魚をうやくしく

神前に備ふ、○又《繪》此幣をもて舞、中間かくら

《繪》と鈴をふり舞、益谷太夫扉をめて入れハ、神女社人

一同神殿をめぐるうちかくら也、御供神酒互にいたゝく、《繪》の社家

講中の連名なかしくふしを付てよミ上る、幣を講中へいたゝかせて

終り也、すぐに講中のこらす上下にていすゝ川に手水し、

(22オ)

御師へ戻り候は八ツ過頃也、講元あいさつに皆々御たいくつ二も

在之、上下御とり御くつろき可被成、膳部も此たびハ木具を

異し可申也との義、一同可然よしにて面々気尽に風をも

いれ候故、暑さをしのき申候、但し御かくらまへに

座付

吸物 ミソ 切目魚

赤飯にしめ

酒 大むし鯛

此節中野館大夫へ立寄り候へハ、手代兵藏、御祓蒸籠持参致候

本膳

二

かつを

かしらず

汁ねいも

うす もくめ

すまし

ミしまのり

めひゞ

板かくつミ入

汁鯛

巻くす切黄白

かき

長ひちき

ゆ

せうが

いり酒

飯

(22ウ)

中鯛

玉子包つミ入

あけつミ入

つる

焼物

色付

包ゆば

吸物

しゅんさい

やき

しゅんかん

貝割

多かほ

皿

長ひしき

多かほ

さんしよ

手しほ

葉にんしん

手しほ二《繪》中二唐ミかん《繪》かく引かへし

氷さとう入

かんてん

香物

ならつけ大こん

瓜

酒肴種々在之

夜に入くほくらへかへり候

廿四日も雨ふり候へと、朝飯過るより磯辺へゆくもあり、芝居へ

急く故献立も忘れ、中の地藏大芝居名代麻や吉之助、座本浅尾

興次郎○極彩色娘扇見物いたし候、おなつ浅尾仙之助○兵助泉川

楯藏○藤兵衛隼人姉川新四郎○眼兵衛五郎右衛門為十郎○名残

狂言出入湊○五郎八備藏○瀧川仙之介○喜兵へ ○ごく門

庄兵衛市川友藏○黒船忠衛門姉川新四郎かうらいやの氣とり奴こ

(23才)

切狂言に置土産、織合上部とてさつま五人切源吾兵へ為十郎

下人伴助新四郎○女郎菊野仙之助○伊三郎備藏○笹野

三五兵衛興清郎、面白き事也、暮合御師へかへり夜食出し

もはや明日ハ出立とて、路々荷物のかしらへ江戸へ送る

荷物ハ講元へ頼ミ候、此中へくぼりの御祓を入たるハ不調法也

船積故延引之程しらねハ持へき荷物へ入へき事也

飛脚屋の手代ハ京大坂いつくにも届荷物を請とれハ、長町の

《絵》や大坂見物之逗留客皆我方へすゝめんと大和廻りの道中記

あたへてゑらふ頼ミけり

廿五日くもれと雨ふらす、朝飯献立略、代官坂半右衛門

暇乞あいさつに出○利休箸五膳袋入
神舞台と申箱入扇形の菓子講中路々へ出之

(23ウ)

夫より皆々旅用意はや玄関に送りの駕籠我等先とかき

すへて札をさし出し、口々に何やの誰様くと呼るゝ人ハ夫々に

暇乞して乗出る、やせて小柄の講中ハさあめせくとうれしかり、

肥ふとりたる大がらハ俄につらをふくらかし、あなたを二人でどふしてと

乗るに、ぢれたる人もあり、いそくとすれと手間とりて、四ツ過る頃

新茶屋の秋田屋に着けれハ、見送りとして講元方御師の代官手代衆

提重もち、菓子酒も出て吞たり喰たり障どつたり、やゝ昼頃も

過ぬれハ皆人々の立仕度名残も御師の手代衆講親たちに

あまへるもいつ迄たてしながの旅、大和廻りや京参りおもひくの

道の連、目出度わかれ立申候

寛政七年卯五月廿五日

資料解説

「伊勢太々神楽講図会」は、彩色の伊勢参宮の記録である。國學院大學図書館所蔵で、表紙中央に「学長芳賀矢一氏寄贈」の貼紙があり奥に「大正十五年一月十一日」の印があり、国文学者の芳賀矢一が同大學学長在任中の大正一五年（一九二六）に納められたものとわかる。体裁は四ツ目で袋綴にされており、法量は縦二三・三センチメートル、横一六・六センチメートルで全二三丁を数え、表紙に打付書で「伊勢太々神楽講図会」とある。

本文冒頭には「太々神楽講連名帳之序」があり、「太々講乎起立、講中毎年限精誠乎積、太々御神楽乎奏奉利」といった毎年の参宮と神楽奉奠を誓う文言と「安永五丙申年夏 久保倉太夫」の日付と署名があり、さらに「講親之方持伝へし書付とて見せけるを写す 寛政七年卯夏日」という書写年月も記される「一オ・ウ」。また、奥書には「寛政七年卯五月廿五日」とある「二三ウ」。なお、文中の講看板の記述に「江戸元浜町伊勢屋清次郎、同吉兵衛、高砂町同利兵衛、同利左衛門、御迎久保倉太夫内坂半右衛門」とあることから「一オ」、安永五年（一七七六）に起立された外宮御師久保倉大夫（太夫）を旦那とした伊勢参宮や神楽奉奠を目的とした伊勢講において、寛政七年（一七九五）江戸元浜町（現東京都中央区）伊勢屋清次郎、高砂町（同前）同利兵衛ら四人が参宮した時の記録とわかる。

全体の構成としては、この①太々神楽講連名帳之序（安永五年夏）「一丁オ・ウ」に続き、伊勢街道と宇治・山田（以下地名は現伊勢市、銭掛のみ現津市）の有名な地点を絵入りで紹介する。②太々神楽講連中迎の駕籠「二オ」③ふきやがらくり「二ウ・三オ」④二見か浦「三ウ・四オ」⑤外宮「四ウ・五オ」⑥天岩戸「五ウ・六オ」⑦相の山「六ウ・七オ」⑧宇治橋「七ウ」⑨五十鈴川「八オ」⑩内宮「八ウ・九オ」⑪朝熊嶽（岳）「九

ウ・一〇オ」⑫ぜにかけ（銭掛）松「二〇ウ」の絵が収められている。

次に実際の行程が記載される。江戸―津間の行程は省略され、⑬五月一日新茶屋（以下現伊勢市）到着「一オ―二オ」⑭同二〇日新茶屋出發し小俣・宮川・川（河）崎・黒瀬・いしき（一色）・三津を経て二見浦に到着し垢離かきをして元の道を引き返し二軒茶屋經由山田の岩渕の御師久保倉大夫の屋敷到着「一二オ―一三ウ」となる。⑮同二一日久保倉大夫の屋敷で太々神楽奉奠後、外宮参詣し、屋敷に戻り神楽膳「一三ウ―一九オ、太々神楽の挿入画一四ウ・一五オ、神楽膳の挿入画一七ウ―一九オ」⑯同二二日久保倉大夫の屋敷を出發し朝熊嶽（岳）参詣「一九オ―二〇オ」⑰同二三日久保倉大夫の屋敷を出發し内宮御師益谷大夫の屋敷に到着し内宮御師による太々神楽奉奠と内宮参拝、神楽膳、その後久保倉大夫屋敷に帰着「二〇オ―二二ウ」⑱同二四日磯辺（現志摩市磯部）・古市（現伊勢市）などへの自由行動「二二ウ・二三オ」と続き⑲二五日暇乞い「二三オ・ウ」で終わる。

紙幅の都合上、この内本資料の由来を示した①、当館の基本展示に利用した部分（御師屋敷模型とそこに配した人形の造作の参考にした②③④と画像利用した⑥）、神宮本体⑤⑩、朝熊岳（金剛證寺）⑪、基本展示で示した一般的な江戸時代の参宮客の宇治山田の町での長期滞在の実例となる⑬⑭⑲、そこに見開きで一体となっている⑫を画像掲載及び翻刻した。

伊勢参宮の記録はすでに多くのものが知られているが、本資料は彩色された挿絵の充実、神楽とそれに続く食膳の詳述という点において特に貴重であり、すでに戦前の神楽の研究で紹介されている（西角井正慶『神楽研究』壬生書院、一九三四年）。明治維新で廃止された御師屋敷での神楽の様子を「あぶくたつたにえたつた」と聞こえたとそのリズムまで活写する点、食膳の終盤に給仕まで踊り盛り上がった点など細密な叙述は大変面白い（一六ウ・一九オ）。近年では、伊勢神宮の第六二回の式年遷宮の時に、

埼玉県立歴史と民俗の博物館で開催された企画展『お伊勢さんと武蔵 神宮展(三) 霞会館資料第三十輯』霞会館、二〇〇七年)などでも紹介された。同図録で「おそらく道中日記として下書きしたものを、江戸に戻った後に清書したものである」とするが、同感である。

当館の常設の基本展示は、本資料を参考として作り上げられた。展示は伊勢神宮に全国各地の人びとをいざなった御師を、三十分の一の御師屋敷模型を軸に復元したものである。ここには、人形も多数設置され、食膳、神楽の様子、客室の調度や道具類まで復元されることから、彩色された絵画資料は欠かせないものであった。また、伊勢参宮を描いた絵画資料としては『伊勢参宮名所図会』や数々の浮世絵が知られているが、多くは和歌の名所や芝居に由来する場を基礎に参宮の事物なども含めものであって、参宮者の動静に即したものはなっていない。その点、本資料で展開する絵入りの行程は、伊勢参宮の実態を理解する上で欠かせないものといえる。なお、付記にて研究の状況について補足するので参照されたい。

【付記1 道中記について】

地域の伊勢参宮資料を集成翻刻した『伊勢道中記史料』(世田谷区教育委員会、一九八四年)が先駆的な取り組みとして知られる。その後も全国各地で伊勢参宮に限らず自治体史編さんの過程で道中記の翻刻などがなされており、それらを集成しルートや旅行の傾向を分析した業績も多い(田中智彦『聖地を巡る人と道』岩田書院、二〇〇四年、高橋陽一『近世旅行史の研究―信仰・観光の旅と旅先地域・温泉―』清文堂出版、二〇一六年、小野寺淳『道中日記にみる伊勢参宮ルートの変遷―関東地方からの場合―』『筑波大学人文地理学研究』一四、一九九〇年)。また三重県を中心とした西国巡礼などの事例集積をもとに、塚本明『道中記研究の可能性』(『三重大史学』八、二〇〇八

年)では道中記研究の意義が整理され、『御師三日市大夫次郎屋敷模型作製関連調査報告書』(三重県環境生活部新博物館整備推進プロジェクトチーム、二〇一四年)では伊勢参宮を中心に概説される。本資料では、津までの行程は省略されており、関東からのルートは明らかとならないが、伊勢神宮外宮前の山田の町到着後の様子が詳述される点は重要である。

【付記2 彩色の絵図について】

市川勝『書状は生きている』(市川勝、一九九〇年)所収の「五十瀬美耶解神風日記」は彩色された挿絵が多数載る参宮記録である。このように本資料以外にも彩色の詳細な図は全国に残っている可能性があり、今後継続した情報収集が必要である。カラーの画像については、当館及び近隣の博物館で発行された伊勢参宮を特集した各種の図録が発行され研究の便に供されており、参宮の実態の考証には欠かせない資料集である(『おかげまいりとええじゃないか―幕末・民衆の熱狂―』(豊橋市美術博物館、二〇〇三年、『ええじゃないかの不思議―信仰と娯楽のあいだ―』名古屋市博物館、二〇〇六年、『名所発見、再発見―浮世絵でめぐる三重の魅力―』三重県総合博物館、二〇二〇年)。また、近世初期の参宮の習俗は、伊勢を描いた参詣曼陀羅や屏風も参考となる(大阪市立博物館『社寺参詣曼茶羅』平凡社、一九八七年、『増補大神宮叢書 二五 神宮神事図録』吉川弘文館、二〇一二年)。さらに名古屋市立博物館所蔵、根津美術館所蔵の屏風など近年注目される資料もあわせ、考察を深めていく必要がある。

【付記3 食膳について】

弘化五年(一八四八)春に、讃岐国寒川郡神埼村(現香川県さぬき市寒川町神前)の某が伊勢講中として、参宮した記録「伊勢参宮献立道中記」(『日本庶民生活史料集成』二〇、三一書房、一九七二年)が

よく引用される。原典は関東大震災などの影響か不明であり、『校註料理大鑑 第十六輯』（一九一五年）『日本料理大鑑 第四巻』（一九五八年）のものが転載され、解題は川上行蔵『料理文献解題』（柴田書店、一九七八年）にも掲載されている。この讃岐国の事例で描かれている食膳は、本資料の食膳に比して装飾的な盛り付けが多く、より儀礼的な感がする。よく似た図は、一般的な儀礼食を叙述する正徳四年（一七一四）刊行の四条流の料理指南書「節用料理大全」（『翻刻江戸時代料理本集成』三、臨川書店、一九七九年）にある。県内の史料では、川合東臯氏紹介の内宮御師の食膳の絵画（『伊勢郷土史草』三、一九七三年）が知られるほか、当館の基本展示室でパネル展示した、御師が刷って配った食膳の図（当館蔵）、三日市大夫次郎の屋敷で使われていた食膳の写真（個人蔵）、内宮の御師の食前を描いた「御神樂行事次第神樂膳装飾・大々神樂之目録」（神宮文庫所蔵）の画像がある。すでに『御師三日市大夫次郎屋敷模型作製関連調査報告書』（前掲）に食膳の復元考証をまとめているがさらに、他の例と比較し研究を深めることが課題である。

【付記4 神樂について】

『御師三日市大夫次郎屋敷模型作製関連調査報告書』（前掲）では、本田安次氏の研究と対照させ復元考証をまとめた。その後、翻刻紹介された重要史料もあることから（『増補大神宮叢書 二四 神宮近世奉養拾要 後篇』吉川弘文館、二〇一五年）、それらを含めた考察も課題である。

【付記5 本書掲載について】

許可等につき安達匠氏（國學院大學図書館）に大変お世話になった。記してお礼申し上げる。



（上…本膳部分
下…嶋台部分）

本書をもとに、原田信男氏（国士舘大学名誉教授）に歴史的監修を、福田浩氏（当時なべ家主人）に料理復元を監修いただき、二〇一四年に愛知県一宮市の料理店末木の多大なるご協力をいただき復元した神樂膳（本膳料理）

あとがき

本冊で取り上げた國學院大學所蔵の『伊勢太々神楽講図会』は、当館の基本展示を制作する際に、御師邸での神楽の様子や、その後に供された神楽膳復元の根拠となった資料です。

御師邸の復元については、既に『御師三日市大夫次郎屋敷模型作製関連調査報告』で詳細に報告されていますが、『伊勢太々神楽講図会』については簡単な紹介にとどまっていました。そこで今回は、復元に用いた部分を翻刻するとともに、挿絵や、絵文字を用いた該当箇所の写真をあわせて掲載することになりました。ただし、紙数の関係等で全丁を翻刻掲載できず、挿絵も一部省略したことににつきまして、ご了解いただきますようお願いいたします。なお、末尾にはなりましたが、翻刻及び写真の掲載につきご快諾いただきました國學院大學にあらためて御礼申し上げます。

資料叢書では今後とも、三重県の自然や歴史・文化・民俗にかかわる資料について掲載し、ご紹介していく予定です。ご支援、ご協力を賜りますようお願いいたします。

三重県総合博物館資料叢書 No. 11

令和七年（二〇二五）三月一八日発行

編集 三重県総合博物館

発行 津市一身田上津部田三〇六〇

電話 〇五九（三三八）二三八三

FAX 〇五九（三三九）八三二〇

印刷 共立印刷株式会社

津市安濃町今徳西前野九〇一

電話 〇五九（二六八）四一一一

MieMu | みえむ